

(第3種郵便物認可)

サイ・テク 知と技の発信 こらむ

[585]

埼玉大学・理工学研究の現場

国が流域治水を推進することになりました。関東の鶴見川の総合治水や滋賀県の流域治水、また学者・研究者がそれ以前から長年提唱していたことが総合化され正式に結実したような状況です。ですから流域の状況を正確に再現できる数値シミュレーションモデルがどんどん大事になっています。ただ、実務の場合、現場と歩調を合わせた数値計算がまずは必要といふことは言えます。他方、大学の研究は実務に直接適用されなくとも突っ走っていく

浸水リスクを可視化する

小林 健一郎 教授



生 ドイツ・シュツットガルト大学
r. - Ing. (博士=工学)。神戸大
学准教授を経て、2024年4月から埼
玉大学理工学研究科教授。専門は環境水
工学、水文学、水工情報学

算をすると、上流で洪水流があふれると下流が助かるとか、実は、この地域は守られているのだなどいろいろ見えてきます。

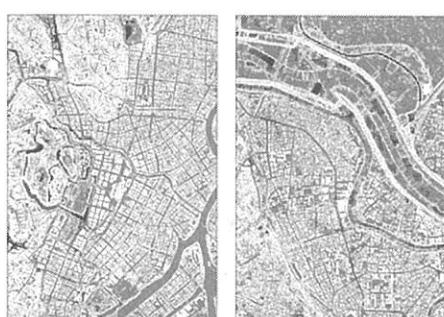
最近では国土交通省による建物ポリゴンデータも公開されていますので、こうしたデータを使えば、地先の洪水リスクやグリーンインフラストラクチャーと呼ばれている田んぼダムの検討もできます。

同じくグリーンインフラで戦国時代から伝わる伝統的治水工法の霞堤などの分析も可能です。この時、大事なのは、ただひたすら広範囲

まで都市の問題を見える化することができるかを突き詰めています。もちろん、画像診断が終わった後は、現場を訪問したり、担当の行政や住民の皆さんと議論をしないと完結するとはないですが、どうして計算・画像でたどり着けるかと

いうところです。

流域治水の話も概念が出てきてから実現するまで20~30年かかります。私のパソコン研究はドイツ留学時代から始まり今で20年くらいです。そもそも花開くであろうか?と思いつつ日々研さんを積んでいます。



東京23区浸水計算イメージ図